

進化経済学会ニュースレター No. 11  
Nov. 2001

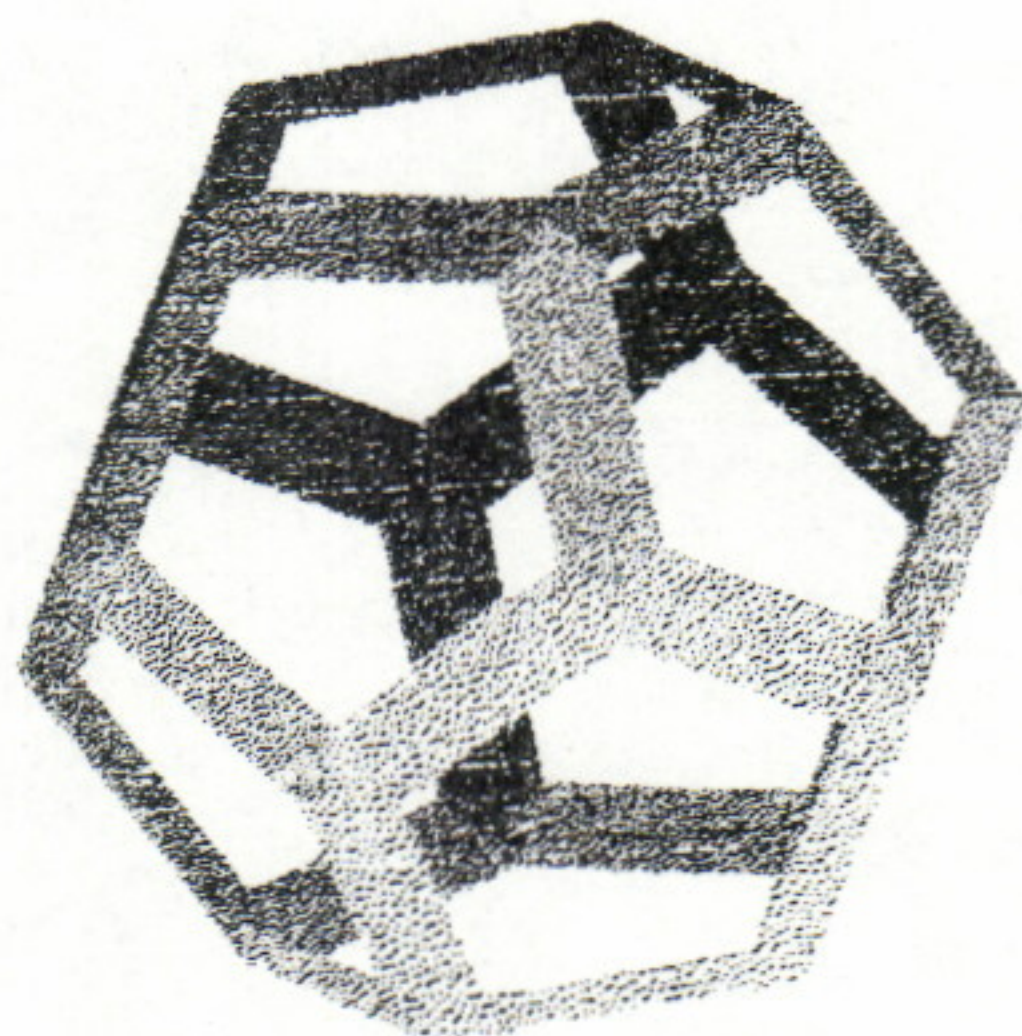
進化経済学会事務局

606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部気付

URL://www.econ.kyoto-u.ac.jp/societies/evolution

Tel.075-753-3427/3455 Fax:075-753-3492 e-mail:yagi@econ.kyoto-u.ac.jp

郵便振替口座：01030-1-22493 (進化経済学会)



\*\*\*記事\*\*\*

杉浦克己会員追悼

オータム・コンファレンス報告

第6回大会採択報告タイトルとセッション区分案

第II期第5回理事会報告

出版問題協議会報告

平成12年度決算

イノベーション研究会のよびかけ

中国の制度経済学

英文出版 Evolutionary Controversies in Economics

国際シンポジウム Evolution/Transition

入会者名簿

名簿修正

第6回大会のおしらせ

\*\*\*\*\*

## 杉浦克己先生のご逝去を悼む

進化経済学会会長 瀬地山 敏

8月7日、先生の訃報を受け驚きました。3月の九州産業大学における大会で、お元気そうな先生と話をする機会がありました。この大会で行われたパネル「経済学の再生をめざして」の精神を引き継いで、杉浦先生が関西大学千里山大会でのパネルを組織されることになっていました。6月に体の具合が悪いので、パネルの編成を柴田徳太郎会員にお願いするという連絡を、関西大学大会運営委員会にいただいたのですが、その折にも深刻な経過のさなかを過ごしておられるとは、露にも思いませんでした。

先生は1997年進化経済学会創設時より常任理事として、学会の基礎作りに貢献していただきました。第2回の東京大学大会は山脇直司会員、丸山真人会員をメンバーとする実行委員会の中心として、ご活躍いただいています。準備の一年は先生が大学を退かれる直前のときであり、大会を引き受けてくださった先生の熱意にあらためて、お礼を申し上げねばなりません。

先生はいわゆるマルクス経済学者として研究を始めておられます。宇野理論の研究をかわきりに、マルクスの一つの重要な関心であった市場と非市場(社会)の関係解明へと、研究を進めておられました(研究の展開については丸山真人会員が、先生のご退職を記念して書いた次のエッセーを見てください:「杉浦克己先生を送る言葉」『社会科学紀要』1997年)。遺憾ながら絶筆になりましたが、杉浦・柴田・丸山編著『多元的経済社会の構想』(日本評論社)を、ご令室よりいただきました。先生の論文「多元的経済社会の構想と経済学の課題」を読み、先生の研究が制度の解明にとどまらず、コミュニケーションを媒介とする制度の構想(設計)という次元にまで深められていることを知りました:「現在必要なことは友愛の原理(互酬)によって自己中心の原理(交換)を押さえ込むことでは必ずしもない。むしろ、新たなる意味を持つ新たなる関係の束を創造し、その中で二つの原理をより立体的に配置・構成していくことであろう。それは市場関係から隔離された共同体を構築することをいうものではない。」(24ページ)

制度の研究は進化経済学会のひとつの重要な課題です。そのフロンティアを探求してこられた先生を喪ってしまいました。学会を代表し、謹んで哀惜の気持ちをささげます。

## オータムコンファレンス概要報告

大阪(千里山)大会運営委員長  
若森章孝

本年のオータムコンファレンスが「制度設計と知のあり方」というテーマを掲げて、

9月15日に大阪の千里山にある関西大学で開催されました。このテーマは「新しい制度をデザインしようとするとき、知識をどのように整理=結合して使うべきか」という問題関心から設定したのですが、当日は約60名の会員が参加し、5人の報告

者と会場の間で熱心な質疑がおこなわれました。

報告をめぐる議論は多岐にわたりましたが、(1) 知識の進化(知識過程)をどのように理解するのか、(2) 進化経済学の立場から「制度設計」の問題をいかに構想するか、(3) 制度設計と知識の進化はどのような関連にあるのか、の3つが中心的な論点であったと思います。「知識の進化過程」をスミスの分業論に立ち返って市場=分知と企業内分業=分知の相互作用として議論する西部報告の前半や暗黙知・形式知にもとづいて政策知形成のモデルを提起する梅本報告は、(1)の「知識の進化」の問題を正面から論じたものでした。出口報告は、エージェントベース・アプローチにもとづいた複雑系としての経済学が21世紀の社会経済システムの創出にどのように貢献するかを議論し、(2)の制度設計の問題を提起しました。また、西部報告の後半は、ミクロから全体の制御を考える構築主義とマクロからミクロの統御を考える操作主義を批判して、「進化主義的な制度設計」を議論するもので、この(2)の論点にかかわっていました。吉田報告は(3)の制度設計と知識の進化との関連にかかわるもので、知の蓄積や知の共有と制度形成との関連が主として議論されました。

質疑は、「制度設計と知識をいかに関連させるか」、「知識の進化と制度形成はどのような位相にあるのか」などをめぐっておこなわれ、とくに、「進化をどのように評価するか」にかかわって、「評価の評価」(評価のルールをどう評価するのか)という問題や、制度設計に際してはローカルな局所的な知識では不十分であって、いわば

ミクロとマクロを連結するような媒体的な知識をいかに考案するかという問題(ガバナンスにかかわる問題)が、重要な論点として浮かび上がりました。

知識の進化過程を議論する方向性は見えてきたが、進化経済学から「制度設計」の問題をいかに構想するかという問題や、知識の進化と制度設計の関連の問題の検討は、このオータムコンファレンスとともに始まったばかりある、というのが率直な筆者の感想です。来春の第6回進化経済学会大阪(千里山)大会でこれらの問題が本格的に議論されることを期待します。

次に、5人の報告の要旨を載せておきます。

問題提起	制度設計と知のあり方
	関西大学 瀬地山 敏

与件のもとで資源の最適配分をはかり、目的を効率的に達成する。経済の本質をこのように理解する考え方に対し、限定合理性の立場からその「最適」性が検討されてきた。もう一つの重要な検討は「与件」という状態(state of arts)、「資源配分」という行為に関係する。

与件を構成するのは、生産技術、ビジネス・モード、ミクロおよびマクロレベルの組織またはシステムなどの知識・制度である。これらは経済活動において与件の性格を持つと同時に、重要な戦略変数であり、企業・産業は戦略的に資源を配分している。また資源配分においてどのように資源を配分するのか、を決める・設計するのにも知識や制度が関係する。

知識と制度はこのように経済の動態を分析するのに、たとえば生産や消費という概念がそうであるように、不可欠な概念である。ハイテク(高度知識)産業における「収穫逓増」の根源を知識生成とそのロックインにもとめたアーサー、内生的成長論で知識の「収穫逓増」を強調したローマー、分業による知識の形成・階層化に注目したロ

一ゼンバーク、ロースビー、企業における経営知の形成を分析するダベンポート、野中。いずれも知識と制度の概念が経済動態の分析に不可欠であると認識している研究者たちである。

知識や制度はこれまでも研究の対象であった。しかしそれはどちらかといえば、できあがったものとしての知識や制度にたいする関心であった。その関心および成果は、現在の経済社会が直面する諸問題にたいする「資源配分」の科学として、深化させる必要がある。すなわち進化経済学は知識・制度の分析にとどまらず、その成果の上に知識・制度の生成・設計をひとつの重要な課題としなければならない、と考える。コンファレンスでは西部忠、出口弘、梅本勝博、吉田和男の諸氏にこの分野における先端の研究を報告してもらい、知識・制度研究の新しい方位を確立する一歩としたい。

#### 経済と知識（経済進化と制度設計）

北海道大学 西部 忠

ハイエクの「経済学と知識」とは異なる視点から、経済と知識の関係を考察し、経済進化における制度設計の可能性を明らかにしたい。ハイエクにおいては、知識の分業が市場で意味のある代替可能性に関する知識に限定されていて、作業場における分業が知識に及ぼす作用が無視されている。知識は、主体的関与と実践的活動を媒介にして新たに創造されるとともに繰り返し再生産される「ある種の労働生産物」といえる。また、それは主体の焦点的意識と身体的営みを不可欠な要素とするから、人格的・暗黙的な性質を帯びている。ハイエクの分知論からスミスの分業論に復帰して知識過程を考えると、そこにスミスのいう「技能・熟練および判断力」が社会的富の源泉であるような市場社会の制度設計が課題として浮上する。ゼロサム原理と互酬的交換を理念とする LETS 市場はその社会的実験である。経済現象に対する構築主義や操作主義の見方は、市場社会における媒体（貨幣メディア）が市場社会のシステム自体を生成させる作用や、またそれが経済主体の内的特性をも変えてしまうという作用に着目し

ていない。進化主義は、構築主義や操作主義を否定するが、制度設計自体を避けるものではない。とくに、ミクロ的マクロ的な経済パラメーターの調整ではなく、媒体の制度設計を重要な政策的課題として認識すべきである。現行の貨幣がもつ分散的システム形成という意義を積極的に認めながら、その欠陥を内在的に除去しうるような貨幣制度を意識的に導入することで、経済主体の内的特性と経済システムの全般的特性を内部から変容・進化させることができるのではないか。たとえば、地域通貨の意義は、こうした進化主義的な制度・政策観から理解すべきである。（この要旨は事務局が作成した。）

#### 新しい社会経済システムの創出と設計問題

京都大学、10月から東京工業大学  
出口 弘

エージェントベース・アプローチに基づいた複雑系としての経済学が、特に制度設計という観点から21世紀の社会経済システムデザインにどのように貢献するかを簡単に論じる。新しい領域横断的な科学革命が生じている。これは組織科学、経営学、社会学、経済学、ソフトウェア科学、進化生物学、ロボティクスなど、自律的エージェントの集団を扱う領域の科学で共有されるシステム観にかんする科学革命である。経済理論も、最適化行動だけする一様で非戦略的なエージェント集団を扱う古い意思決定のパラダイムから、学習を行い内部モデルを相互に参照し、環境同定学習や戦略学習をする自律的エージェントを扱う新しい意思決定パラダイムに移行する必要がある。新しい経済学のセントラルドグマは、自律的エージェントからなるシステムで行われる多彩なゲームの解析と、そのゲームを成り立たせる制度的境界条件のデザイン論におかれる。それに対応して、政策も、エージェントの活動の制度的境界条件をデザイン、あるいは支援することで、エージェント社会のマクロ目標を充足するように間接的に制御するものとなる。（この要旨は学会事務局が作成した。）

## 政策知創造と制度進化

北陸先端科学技術大学院大学  
梅本勝博

制度を、個人や組織の行動を規制するために、最初は人間によって意図的に創られ、その後は創発的に進化していく社会的なルールだと定義すれば、それは公共政策であり、知識だとも言える。政策には、行為と知識の二面性があり、政府による一連の行為（不作為も含む）という定義が教科書的な通説であるが、一方でそれは、行為と結果の因果関係を含む暗黙的あるいは明示的な理論という意味では、知識と見ることができる。経済学者にとっては、経済政策を考えてみれば、政策が行為のみならず知識であることは、容易に理解できるだろう。

筆者は、政策という知識が創造され制度として進化していくプロセスを説明する「政策知創造のEASIモデル」を提唱している。このモデルは、「体験する・出会う・共感する」、「表現する・分析する・議論する」、「総合する・体系化・形にする」、「実行する・制度化・内面化」の四つのフェイズに分かれ、EASIは、それぞれの行動を英語にしたときのイニシャルを示している（詳しくは、以下のURLを参照されたい。<http://www.jaist.ac.jp/ks/labs/umemoto/KCC.html>）。

そのスパイラル・プロセスは、「思いを言葉に、言葉を形に、そして形をノウハウに」で表現できる。すなわち、体験によって「思い」が生まれ、その「思い」を「政策コンセプト」（政策アイデア）に表現し、既存の施策や予算措置などと総合して「政策」という形にする。その政策を「実行」する過程で、社会・組織・個人はノウハウ（社会的には制度や慣習、組織的・個人的には実務能力）という暗黙知を蓄積していくが、やがては社会的・自然的環境が変わるとその政策は現実と合わなくなり、個人がその矛盾を体験することで、新たな政策知創造のサイクルが始まる。

つまり、知識としての政策がくり返し実行され、それがうまくいけば当然のこととして暗黙的なノウハウ、すなわち制度として社会に定着するが、やがてはそれも環境

変化にともなって消滅したり、進化したりしていくのである。

## 知と制度

京都大学 吉田和男

個人にあっては「知」は「行」の始めであり、「行」は「知」の成れるところであるが、社会制度が秩序として人々の「行」を規定するものとするならば、制度が知の代替物であることとなる。すなわち、人々が社会秩序を持っているのは「知」によっている場合もあるが、「制度」によっている場合が大きい。すなわち、制度が人々の行動に規範を強制することで「知」に代わって「行」を生むことになる。

すなわち、「知」に代替する「制度」が社会制度を作り、人々の行動を規定することで、より効率的な活動が可能になる。制度がそれぞれの経済社会に蓄積された生産の効率化の「知」を内蔵することで、より「効率的（何がどういう意味で効率的かは別にして）」な社会の営みを可能にしてきた。社会主義経済が資本主義経済に移行したときにはそのような「知」の蓄積に裏付けられた制度の欠如のために大きな混乱が起こることになった。

また、これは社会システムの制度ではなく私的な制御の仕組みにも適用されることになる。企業は社会的な制度の中から生まれたものであるが、各企業はそのような制度から生まれたものではない。しかしながら、社会の中で知識を蓄積した者が集まり、一つの行動体である組織を形成して、個人では不可能であった高い生産性を実現していくことになる。ここでもその知の蓄積は制度となり、高い生産性を実現していくことになる。例えば、日本型経営システムといった制度が形成されることで一時的ではあったが、高いパフォーマンスを生むことになる。そして、新しい知識の蓄積はイノベーションとなって新しい制度へと「進化」することになる。

制度はいかにして生まれるかを考えれば、これは社会に蓄積された「知」の問題になる。その関係を理解してゆくことが社会科学の基本となる。

ここで、知-情報システムを構想することを提唱しよう。「知」はその字義からして「ストック概念」である。これに対するフロー概念は「情報」になる。知は情報を生産し、これが生産を行う。また、消費者の情報はこれを受け取って知によって生産のための情報に変換して生産を行わせる。生産者の情報は、さまざまなチャンネルによって消費者に伝達され、消費者の知によって解析されて消費を刺激する。

人々間の情報交流と共通の「知」の蓄積を重視することは、複雑性に潜む自己組織化のメカニズムを活用しようという考え

である。社会システムは何らかの意味で共通の情報・価値観を基礎にしながら、自発的に協調して複数の目的を達成するために革新されて行く過程となる。この場合、人々の行動を拘束する制度、法律、慣習といったものがある。しかしながら、社会の複雑性を完全に解決できるような制度等はありません。常に非平衡の中から革新を起こして新しい秩序に移ろうとする。特に、環境が大きく変化する時には、その変化との矛盾から大きな動態を生むことになる。(この要旨は、当日の吉田会員のレジュメをもとに、大会実行委員会がまとめたものです。)

### 第6回大会採択報告リストとそのセッションへの分類案(最終決定はプログラムで)

#### 政治経済学の再生をめざして

提案者: 柴田徳太郎(東京大学経済学部)  
問題意識: 本セッションは、2001年3月の進化経済学会福岡大会で行われた「経済学の再生をめざして」というセッションの問題意識を引き継ぐものである。

- 柴田徳太郎「制度進化論の可能性」
- 浦園宣憲(拓殖大学経済学部)「市場経済とコンヴェンション」
- 佐藤良一(法政大学経済学部)「経済理論における主体—Homo Reciprocansをめぐる」

#### 制度設計と知のあり方(4報告を計画中)

- 出口弘(東京工業大学総合理工学研究科・知能システム科学)「プラットフォーム外部性と技術革新」

#### 市場と進化(3つの報告)

- 中島義裕(大阪市立大学・経済学部)「金融市場に見られる不確実性と挙動の安定性」
- 水野 誠((株)博報堂・研究開発局)「消

費者選好の進化—実験的研究の蓄積から何を学ぶか—

- 木村誠(東京大学大学院・先端学際工学専攻)「デジタル著作物における価格モデルと制度進化」

#### 進化と社会システム(4つの報告で構成)

- Lluis Valls(バイス・ユイス)(立命館大学大学院) "Construction of the collective coordination system in the Japanese bioindustry: New organizational models for the technology-based economy"
- 梁峻豪(京都大学大学院)「韓国における蓄積体制の変化と金融危機」
- 中原隆幸(四天王寺国際仏教大学)「政治的なるものと経済的なるものの位相学—政治と経済との共進化に関するレギュラシオニストの見解」
- 馮銳 Feng Rui(大阪市立大学大学院)「市場経済移行期の中国産業政策における地方政府と中央政府の行動」

#### 技術革新と経済(6つの報告を I. 技術革

新と経済、II. 技術革新と経済 (に分ける)

- 有泉哲 (茨城大学人文学部) 「アメリカにおける労働市場の変容—進化ゲーム・モデルによる検討」
- 宇仁宏幸 (京都大学大学院経済学研究科) 「デバイスのイノベーションと最終商品のイノベーション—シャープの液晶ディスプレイ開発を中心に」
- 泉 宏明 (NEC 広島) 「ロビンソン・クルーソーの経済と現代資本主義経済—実物体系からの景気循環論または不均衡動学」
- 杉若浩孝 (神戸大学大学院経済学研究科) 「日本工作機械産業における技術パラダイムの形成とその影響に関する統計的分析」
- 徳丸宜穂 (学振特別研究員・京大院) 「イノベーションシステムの領域性と技術開発のグローバル化—技術開発分野の空間的重層性」
- 李皓 (京都大学大学院) ・出口弘 (東京工業大学) 「企業投資の動的資源配分と競争的成長—R & D 投資と設備投資を中心に」

経済思想と進化 (3つの報告で構成)

- 有賀裕二 (中央大学商学部) “A New Approach to Nonlinear Decision Function of Social Process: Towards a Macroscopic Microeconomic Specification”
- 江口友朗 (名古屋大学大学院) 「制度経済学における〈制度〉と〈個人〉—諸学派の比較検討から」
- 宮代以作 (京都大学大学院) 「厚生評価と価値観形成」

進化ゲームとシミュレーション (このセッションを2つに分割する)

- 小山友介 (学振特別研究員・京都産業大学客員研究員) 「相互学習と協力発生」
- U-Mart 委員会の代理 (申込者: 小山友介 (学振特別研究員))
- 「研究ビジョンの提示」 (経済系担当)
- 「次期サーバーの紹介&U-Mart2002の仕様公開」 (工学系担当)
- 山本秀一 (和歌山大) 「中間組織による社会的ジレンマ解決問題: エージェントベースモデルによるアプローチ」
- 田畑 稔 (神戸大学工学部情報知能工学科・数学系) ”A self-referential agent-based model that consists of a large number of agents moving stochastically in a discrete bounded domain”
- 中山晶一郎 (金沢大学工学部) 「エージェント・アプローチによるカフェ選択問題: 繰り返し選択行動における思いこみの発生」
- 在間敬子 (京都大学大学院) 「環境配慮行動に関するエージェントベースモデル」

通貨・金融理論と進化経済学 (新しく構成する)

- 内藤敦之 (一橋大学大学院) 「ケインズの貨幣観—計算貨幣と内生的貨幣供給」
- 國枝卓真 (京都大学大学院) ”The Deflation Trap of Japan”
- 村越一夫 (京都大学大学院) 「ポストケ

インズ派における金融理論について」

る社会構造変容創成について」

**自由論題**

- 香村由紀(アネルバ(株))「制度について」
- 小川一仁(京都大学大学院)「マーケットマイクロストラクチャー理論と計算機実験による市場間比較」
- 逸見 彰彦(マーケティング総合設計研究所)「大域社会移入政策モデルによ

**ポスターセッション** (大阪市大の中島会員と相談して報告者を探しているところですよ)

- 原 章(東京工業大学大学院・総合理工学研究科物理情報システム創造専攻)「エージェント群のグループ構造を利用した株価変動メカニズムの解析の研究成果について」

\*\*\*\*\*

**第 II 期第 5 回理事会報告**

1. 進化経済学会第 II 期第 5 回理事会は 2001 年 9 月 15 日の正午から午後 2 時にかけて、新関西大学会館ポンブラットで開催された。会長、副会長、および 13 理事が出席した。11 理事が委任状を提出した。
2. はじめに、第 2 回東京(駒場)大会を成功させ本学会に多大の貢献のあった杉浦克己理事の急逝にたいする弔意が瀬地山会長から表明された。また、事務局から伯井泰彦会員、小林一三会員の逝去が報じられた。
3. 上記 3 名の物故者のほか、林大三、森口親司、中津孝司、野村親義、ミカエラ・ノタランジェロ、小野塚佳光、阪上孝、坂井昭夫、櫻井武司、皇紀夫、田中聖人、十名直樹の 12 会員から退会の意思表示があったことが報告された。また賛助会員「河合塾経済研究会」(名古屋)と「現代ヨーロッパ研究会」(京

- 都)は、先方の希望により「河合文化教育研究所(京都)」に統合するが、団体加盟の場合の複数アドレス送付を認めて、配布物は従来どおり名古屋と京都の 2 アドレスに送付することにしたと事務局からはかられ了承された。
- 4. 個人会員の入会申し込み 11 件(うち院生 2 名)のリストが示され、全て入会資格を充たしていると判定された。入会承認は来年 3 月の総会になるが、理事会による入会資格承認は済んでいるので、今年度からの会員とみなされる。したがって、新規入会者 11 名を加えた現在の会員数は、個人会員 575 名(うち院生会員 70 名)、賛助会員 1 団体である。

入会資格が承認された申込者氏名：岑智偉、Dimiter Ialnazov, 中嶋真澄、斎藤實男、佐々木政憲、末松千尋、谷田則幸、塚本恭章、山本秀一、桑原裕、宮代以作

5. 平成 12 年 4 月 1 日から平成 13 年 3 月



31日に至る平成12年度の決算が富森虔児監査委員の署名を付して報告された。

収入概要:前年度繰越 827,099 円、  
会費 4,900,000 円 書籍売却  
10,00 円、利息 913 円、雑収入  
181,102 円 (東京大会残金など)

支出概要: 大会費 1,000,000 円  
通信費 228,384 円 出版費  
63,000 円 出版費 63,000 円 事務  
用品費 154,591 円 交通費  
419,600 円 人件費 396,000 円 送  
金手数料 32,130 円 会議費  
20,000 円 講演会謝礼 部会等補助  
費 50,000 円 雑費 2,388 円 小  
計 2,396,093 円 平成13年度への  
繰越金 3,523,021 円

繰越金が多いのは、論集送付代(封筒込みで約30万円)と英文出版の買上金約150万円が平成13年度に繰り延べになったためである。

6. 平成8月31日現在の会計状況が報告され、英文出版の買上金および大会準備に十分であることが確認された。ただし、年会費をコンスタントに支払っているのは正会員約480人中350人前後にとどまり、また院生会員の会費徴収率も悪いことが示された。一見健全に見える会計状況は、出版活動の停滞と過年度分の会費の支払いによるところが大きい。これについては、個人別データを点検しながら、事務局が会費徴収の努力をおこなうこととした。
7. 若森大会担当理事から、第6回大阪千里山大会の報告申し込み状況が報告された。33件の報告申し込みがあり、ま

たオータムコンファレンスを受けた独自企画もたてたいとのこと。独自企画や司会・討論者として理事会員には特に協力をお願いしたいという依頼があった。申し込みのあった報告は、細部の調整はありうるが、みな採択してよいということになった。

8. 八木常任理事から、〈移行経済と進化経済学〉の国際シンポジウムの説明があり、3月28日に京都大学でフルデイセッションをおこなったあと、29日に理論的なセッションを学会大会の午後の国際セッションとして関西大学でおこなう予定であると報告された。財政は、国際交流基金その他からまかなうので、学会に大きな負担はかけないで開催できる見込みである。
9. 「ゲネシス2」の編集状況が担当の八木編集委員から説明された。まだ未着、および不完全な原稿もあるが、すでに翻訳作業の段階に入っていて、来年の4-5月頃に刊行したいと説明された。また、「ゲネシス3」は、6月23日の編集問題協議会で、〈制度と知識〉をテーマとして瀬地山会長が補助役の編集委員とともに編集にあたり、2003年に刊行したいと説明があり、了承された。
10. 懸案のジャーナルの創刊については、6月23日の編集問題協議会の議事内容が報告され、国際学術誌の創刊に向けた具体案を作成することが了承された。(なお、理事会翌日の16日にこの問題についての拡大編集委員会が開催され、2004年創刊に向けた進行予定が確認された。)

11. 編集関係の事項と関連して、今後、学会で刊行する雑誌/出版物/大会報告集掲載論文については学会が（オンラインでの公開を含む）著作権をもつことにすることが了承された。ただし、それは原著者の著作権を損なうものではなく、原著者の意思を最大限尊重し、原著者の著作権利用についても対価を要求するものではないとすべきであろう。こうした「権利」の性質とその遡及可能性について議論があったが、今度の総会で文章化して決議することになった。

12. 部会活動報告はニューズレターでおこなうこととした。なお、本年4月から活動している「イノベーション研究会」（幹事：弘岡正明・瀬地山敏）が部会としての認定を希望しているので、次回の理事会で認定してもらいたいとの発言があった。

（文責：事務局 八木紀一郎）

### イノベーション研究会のよびかけ

進化経済学は市場とそれに関連する諸システムの動学的分析を課題としています。たとえば伝統的な経済学で与件とされてきた技術革新の開発・普及、いろいろの組織形態や制度の形成・存続の解明は、その課題から必然的に派生する重要な agenda のひとつであり、多くの研究が進められてきました。

進化経済学はこのように過程（process）を重視する分析ですが、過程の叙述・理解にとどまらず、その理解にもとづいて、システムの設計という政策的提案も課題として追求する必要があると考えます。過程の正確な分析は当然、すぐれたシステム設計につながるという期待は、漠然とはしていませんが、すべての研究者の心の中にあるはずですが、しかしその方向に踏み出すという姿勢は、いまだ確立されたとはいえません。不良債権問題を処理するにはどうすればよいか、技術開発のシステムはどう作れば

よいか。進化経済学者として答えよ、といわれたら、立ちすくんでしまいそうです。これらの問題はいずれも限定合理性のもとでの資源配分問題です。限定合理性という前提で過程の動学的分析をめざす進化経済学は、その資源配分を設計する知識を提供する責任があると思われます。

このような視点に立ってわたしたちはイノベーションを研究することにしました。もとよりイノベーションは技術の分野だけではありません。技術開発・普及と同じように、限定合理性のもとで資源の配分を決定する知識がもとめられるすべての分野（たとえば産業組織、生産システム、消費者行動など）で、新結合が模索されています。

同じ関心を持っておられる研究者の方にメンバーとして参加していただきたいと思えます。京都で隔月の研究会を開きます。遠方の方にも参加をよびかけています。毎回の参加はご無理でも、関心の交流が継続するような研究会の運営方法を、いま工夫

しているところです。運営方法の詳細は後日お知らせします。お答えをいただければ幸いです。

2001年4月28日

提案者：弘岡正明 hirooka@umds.ac.jp

瀬地山敏 setiyama@ipcku.kansai-u.ac.jp

### 第1回研究会

2001年6月30日(土) 14:00-18:00

1. 弘岡正明 (流通科学大学)

技術革新のロジスティックダイナミズムと経済発展

2. 徳丸宜穂 (京都大学大学院)

Schumpeterian patterns of innovation とイノベーションシステム：半導体産業における流動的企業群と安定的企業群の共存構造

### 第2回研究会

2001年9月29日(土) 14:00-18:00

萩原泰治 (神戸大学)

「技術革新の組合せモデル-プロダクトライフサイクルと市場構造-」

穂刈亨 (京都大学経済研究所)

ゲーム理論における「知識」と「限定合理性」について

場所 京都大学楽友会館

### 第3回研究会

2001年11月10日(土) 14時~18時

京大楽友会館(市バス「近衛通」停下車すぐ/京阪電車丸太町駅から徒歩15分)

七條達弘 (大阪府立大学経済学部)

「進化モデルを利用した制度表現についての一考察」

古江晋也 (関西大学大学院社会学研究科)

「知識としての生産システム」

連絡先:徳丸宜穂 (norio-t@mbox.

Kyoto-inet.or.jp)

### 合同研究会のお知らせ

制度の政治経済学部会/現代日本の経済制度研究部会

2001年11月23日(金) 13時~17時

京大会館102号室

内容：以下の著書の合評会

『デジタル化時代の組織革新-企業・職場の変容を検証する』(尾高煌之助・都留康編, 有斐閣) について

評者：徳丸宜穂(京都大学大学院、学振研究員)

リプライ：都留康(一橋大学)

『生産システムの革新と進化-日本企業におけるセル生産方式の浸透』(都留康編, 日本評論社) について

評者：富田義典(佐賀大学)

リプライ：都留康(一橋大学)

事務局：宇仁宏幸(京都大学)

平野泰朗(福岡県立大学)

### 中国制度経済学理論研究会に参加して

八木紀一郎

来春の「移行経済と進化経済学」の国際シンポジウムで連絡をとっている北京の天則経済研究所から、制度経済学の学会を開くので来ないかというメールが8月の末に舞い込んだ。ただし滞在費はもつが旅費はもたないとのこと。添付ファイルの招聘状は、中国語で描かれた簡単な1枚のものだが、9月の22-23日に北京西郊の臥仏寺飯店でやると書いてある。どんな会になるかわからないが、ともかく行くことにしてディスカウント航空券を入手した。

プログラムは現地でもらったが、不安の中、外国人は私だけのまったく中華的会合であった。(Steven Chang という英語名を

もつ張五常さんは奥さんが通訳したが、もとの言葉は香港の広東語であった。) 15の報告にそれぞれ2人のコメンテーターがつく。報告のタイトルを訳して列挙すると、「プリンパル-エージェント関係の最適期間と危険分担」、「人口土地比率の変動と土地所有権の変遷」、「現代中国の法律の中の習慣」、「市場経済の倫理と道徳的基礎」、「ゲームの結果としての制度」、「競争、インサイダーコントロールと経済効率」、「知識経済の制度的基礎」、「不完全契約理論」「転換経済におけるシーケンシングと並行的部分的アプローチ」等々。報告しない参加者が配布した論文も20点ぐらいもらった。理論のおさらいや知識の整理のウェイトがまだ大きいようだが、背後には、土地などの所有権をどう整備していくかということや、企業の自律的なガバナンスを、社会主義の市場経済とどう結びつけるかという問題があるらしい。

もらった論文の中には、小平理論からはじまるオーソドックスな制度改革論もあれば、中国3千年の歴史をふりかえった歴史解釈もある。しかし、一般的には、欧米の組織の経済学や新制度主義の導入に関心が向いているらしい。会合の終わりには、アメリカの新制度主義の学会に出席した2人の若い研究者がPCをもちこんでアメリカ学界の最新知識を披露した。中国語で熱心におこなわれていた議論をフォローすることは私にはできなかったが、それでも数人、独自の意見をもったすぐれたリーダーがいることがわかる。参加者のなかでは、林毅夫、樊綱、盛洪、韋森などがそうではないだろうか。

主催者の天則研究所の張曙光所長と丁利

代理が共同で書いたサーベイ論文を読むと、今後の方向は進化的視野に向いているように思えるし、また汪丁丁が配布だけした(欠席していたと思う)ペーパーは進化経済学の方法論にかかわるものであった。しかし、進化ゲーム理論は配布されたペーパーのなかに見当たらなかったし、シミュレーションや実験経済学もない。どうも、進化経済学はまだ中国の経済学者では一般的認知を受けていないようだ。私は、ありあわせの「社会経済体制の進化とガバナンス」という論文を縮めたものを通訳をつけてもらって読み上げたが、進化論は生物学なのに経済学とどう関連するのかというコメントには絶句した。通訳が業務放棄したのでリプライは英語でしたが、これもあまり反応がない。個人的に話して英語が通じたのは3人に1人くらいだったから、それも当然だろう。私の方は拍子抜けしても主催者たちは変な顔はしていないし、終わると若い研究者が数人やってきて、あとでフルペーパーをくれとか、一緒に写真に収まろうというから無視されたわけではないようだ……。これって、昔日本でもあった情景では？

この研究会が終わった翌日、北京の三聯書店に行って経済書の書棚をみた。全体の点数は少ないが、新しい面白そうな本が次々に出ている。張曙光さん、楊瑞尤さんなど、参加者の最新の著書もあった。張維刘さん、吳敬連さんの新刊もある。翻訳書の中には、カール・メンガーの『国民経済学原理』もあった。驚いたのは、汪丁丁の『自由人的自由連合』というタイトルの本が堂々と並んでいたことだ。中国でも、自由が公然と語れる時代が来たのだろうか。ゆったりとした段階で、数人の若者が本を

読みながら座っている。2階には、PCを置いたコーヒー・ラウンジがある。国家から独立した天則経済研究所の存在もそうだ

が、こうしたすてきな書店が存在することも、中国における学術の自由が本物になったことを示しているのではないだろうか。

==== 英文出版 =====

*Evolutionary Controversies in Economics:  
A New Transdisciplinary Approach,*

Ed. by Yuji Aruka as a Publication of Japan Association for Evolutionary  
Economics, Springer Verlag Tokyo, June 2001

シュプリンガー東京への直接注文による特価期間は終了しました。これからは、学会事務局宛にご注文ください。学会購入分を送料込み 5,000 円で頒布します。校費でのご購入の際は、必要な書類を注文の際にご連絡ください。

CONTENTS

Preface	S. Sechiyama	Attractor Stability in Unemployment and Inflation Rates	S. J. Gaustello
Introduction	Y. Aruka		
<i>I. Streams of Evolutionary Economics</i>		<i>III. Experimental Economics and Evolution</i>	
A Viewpoint on Evolutionary Economic Theory	R. R. Nelson	Evolution and Negative Reciprocity	D. Friedman
How Can Evolutionary Economics Evolve?	G. M. Hodgson	Avatamsaka Game Structure and Experiment on the Web	N. Singh
Economics and Darwinism,	U. Witt		Y. Aruka
<i>II. Evolutionary Nonlinear Dynamics</i>		<i>IV. Multiagent System and Complexity</i>	
Economic Development in the Arts, Crafts, and Science	T. Puu	On the Relevance of Genetic Programming to Evolutionary Economics	S. -H. Chen
Nonlinear Dynamics of Debt and Capital: a Post-Keynesian Analysis	T. Asada	Social Interaction and Coordination Failures in a Simple Model of Technology Adoption	D. Delli-Gatti

M. Gallegati  
Effects of Competitive Meta-players in the  
Distributed Social Dilemma  
T. Yamashita  
A. Ohuchi

*V. New Frontier for Evolutionary Economics*  
U-Mart: A Test Bed for Interdisciplinary  
Research into Agent-Based Artificial  
Markets

H. Sato  
Y. Koyama  
H. Deguchi  
K. Kurumatani  
Y. Shiozawa,  
Econophysics: Empirical Laws, Theory and

Application  
H. Takayasu  
The Master Equation Approach to  
Self-Organization in Labor Mobility  
M. Tabata  
N. Eshima  
I. Takagi

*VI. Economic Heresies*  
From the 'Historical Time' to the Economics of  
Complexity  
M. Yoshida  
Why Should Economics Including (Old)  
Institutionalists be Interested in Critical  
Realism?  
T. Lawson

***Evolution/Transition: Evolutionary Perspectives on Transition Economies***  
**進化と移行 国際シンポジウム実施の暫定案**

1990年代には、それまで集権的な計画経済体制をとっていた諸国の大部分が、様々な形での政治変動をとめないながら、いっせいに市場経済への移行を開始しました。10年を経て「移行は完了した」とも言われますが、本当にそうでしょうか。また、一体、何から何への「移行」だったのでしょうか。私たち、進化的経済学者の目から見ると、この移行過程の基礎には、個々の経済主体・経営主体の行動の変化やその相互作用があり、それらは全体として、「経路依存性」や「思わざる結果」（創発性）を生み出す進化的な過程です。進化的経済理論は、これまでミクロの主体の相互作用

とそのパターンの変化を主として理論化して来ましたが、それをマクロの体制的变化と結びつけ、歴史過程の認識に資することができるかどうか問われています。このシンポジウムは、欧米だけでなく、中国・ロシアの制度的・進化的経済学者の参加を得て、移行経済における進化的側面について討論したいと思います。

**2002年3月27日（夕）**

レセプション

ゲストの宿泊する京都ガーデンパレス（地下鉄丸太町、御所西）にて

**2002年3月28日**

フルデイセッション

京都大学経済学部にて

**Part 1. Diversified Paths of Transition**

大津定美 (神戸大学)

「移行の10年」(仮題)

**<Central and Eastern European Countries and Russia>**

Kazimierz Poznanski (University of Washington, Seattle)

田中宏 (立命館大学)

An Approach to Typology of Transition Economies

溝端佐登史 (京都大学)

Lessons from Economic Transformation: Government, Markets, and Economic Actors in Russia

Dimiter Ialnazov (京都大学)

The Currency Board in Bulgaria Seen from an Evolutionary Perspective

吉野悦雄 (北海道大学)

Family is a Synthetic Symbol of Social Analysis - from the viewpoint of Central European history -

門脇 延行 (滋賀大学) 討論者

**<Chinese Way of Evolution/Transition>**

Feng Xingyuan (Universitaet Witten/Herdecke)

Competitive Dynamics of Institutional Change in China: An Evolutionary Perspective on the Chinese Transition to the Market Economy

Zhengfun Shi 史正富 (Fudan University, Shanghai)

Rationality and Path Dependence on Institutional Change: The Case of

China's Economic Reform

宋磊 (Song Lei, G: 名古屋大学)

The Limit of Gradual Reform without Long-term Perspectives: Inability of Institutional Arrangement in Mainland China

Bernard Chavance (Universite de Paris, VII) 来日?

山本裕美、塩地洋、上原一慶 (京都大学)

3月29日 午後

大阪(千里山)大会国際セッション

**Part 2. Evolutionary and Institutional Theories of Transition**

八木紀一郎 Introduction

Vladimir I. Maevsky (Center for Evolutionary Economics, Moscow)

Evolutionary Economics and Some Problems of Modern Russian Economy

Sheng Hong 盛洪(Unirule Institute, Beijing)

Eric Magnin (Universite de Paris VII)

A Contribution to an Evolutionary and Institutionalist Approach of the Transition Process

Carsten Herrman-Pillath (Universitaet Witten/Herdecke)

富森慶児 (桜美林大学)

セッション終了後は、進化経済学会の懇親会に参加

開催責任者: 八木紀一郎 (京都大学経済学部) [yagi@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:yagi@econ.kyoto-u.ac.jp)  
FAX:075-753-3492 (学部事務室) 参加者・討論希望者はご連絡ください!

T:03-3501-8231 E:sunami-atsushi@rieti.go.jp  
**高橋真吾** O:〒169-8555 東京都新宿区大久  
保 3-4-1 早稲田大学理工学部経営システム  
科 T:03-5272-4544 E:shingo@sys.mgmt.  
waseda.ac.jp

**竹本洋** T:077-579-0178 E:takemoto@  
kwansei.ac.jp  
**丹沢安治** 〒215-0017 川崎市麻生区王禅寺  
西 2-28-5

## 第6回進化経済学会大阪（千里山）大会

開催日時：2002年3月29日（金）、30日（土）

開催場所：関西大学経済学部（吹田市山手町3-3-35）

### テーマ：知識・組織・社会のイノベーションと進化経済学

今回の大会は、「新しい制度を設計（デザイン）しようとするとき、知識をどのように整理＝結合して使うべきか、そのような知識と制度進化はどのような関連をもっているのか」という関心から上記のようなテーマを掲げました。制度進化と知識の関連をめぐる多様な議論が活発におこなわれることを期待しております。

報告が採択された方は来年1月26日（土）までに、『進化経済学論集6』に掲載するA4版10ページ以内の報告原稿（複写可能なもの）にテキストファイル形式またはMSword形式で入力したフロッピーディスクを添えて、お送りいただきます。学会は、これらの報告原稿やファイルを学会、あるいは大会用のホームページなどで公開する権利を有します。

○郵送の場合：〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学経済学部・若森研究室  
進化経済学会大阪（千里山）大会運営委員会 宛

電話：06-6368-0634（若森研究室） 06-6368-0627（安喜研究室）  
06-6368-0787（斎藤研究室） 06-6368-1147（経済学部事務室）  
FAX：06-6339-7704（経済学部事務室）

.....  
※第6回進化経済学会大阪（千里山）大会運営委員会(evoeco@ec.kansai-u.ac.jp)  
委員長・若森章孝（関西大学経済学部；wakamori@ipcku.kansai-u.ac.jp）  
副委員長・安喜博彦（関西大学経済学部；yasuki@ipcku.kansai-u.ac.jp）  
事務局長・斎藤了文（関西大学社会学部；saiton@ipcku.kansai-u.ac.jp）  
ホームページ（<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~saiton/evoecomenu.htm>）